

天性寺蔵『蛸地蔵縁起絵巻』(天性寺聖地蔵尊縁起)についての覚書

A Simple Study on “Tako-Jizô Engi Emaki”

大橋 直義¹

¹実践女子大学文学部(元和歌山大学紀州経済史文化史研究所)

蛸地蔵天性寺(岸和田市南町)所蔵『蛸地蔵縁起絵巻』(天性寺聖地蔵尊縁起)について、その略書誌を示しつつ、縁起本文の分析を通じて、十八世紀末から十九世紀半ばまでの成立とする研究史に再考を促した。また、その縁起本文は、和泉松浦氏に関わる霊験伝に關するの傳承を端緒とし、そこに岸和田城主の変転と城下町の形成の歴史が関わって形成されたものと位置づけた。

キーワード：岸和田、蛸地蔵、天性寺、縁起、絵巻

1. はじめに

岸和田市南町に所在する蛸地蔵天性寺には『蛸地蔵縁起絵巻』と通称される〔江戸中期〕制作の縁起絵巻一軸が蔵される。例年晩夏に開催される同寺の千日大法会では、参詣者に向けてこの絵巻が披かれ、秘仏である蛸地蔵も開帳される。南海電鉄・蛸地蔵駅の駅舎の天窓には、この絵巻に材を得たステンドグラスがはめ込まれており、この絵巻が岸和田城下町のシンボルの一つとして認識されていることは疑いない。

稿者は、和歌山大学紀伊半島価値共創基幹紀州経済史文化史研究所が主催した2020年度企画展「泉州 岸和田の宗教文化—高僧伝と寺社縁起—」を開催するに際し、この絵巻を熟覧する機会を得た。展覧会場では本絵巻の複製を展示するとどめたが、同展図録には原本の画像を全編にわたって収録している。以下、小稿は、同展を開催するに際し作成した展示品解説に増補・改訂を加えたものである。

2. 略書誌

〔江戸中期〕写、絵巻一軸。紙本著色。35.0×1049.2 ㎝。〔近代〕後補緑地金糸蜀江文絹表紙(35.0×34.5 ㎝)。楮斐混漉料紙(近代裏打)。内題、無。奥書、「天性寺聖地蔵尊縁起浄書了／弘慶叟(朱印)」。

印記印面不明(一文字目判読不能、二文字目「賛」か)。本文一筆。漢字平仮名交じり。本文字高、29.0 ㎝。紙数、全13 紙。ただし第13 紙(26.5 ㎝)は後補。別筆で「地蔵尊縁起今茲因裝潢修飾記蓋為／開扉也 護持山十八世／安政四年三月上浣 慈譽仁達」とあり、安政四年〔1857〕に修覆されたことが知られる。書写者である弘慶については未詳。画工不明。料紙の折れ、顔料の微細な剥落などが一部見られるものの、保存状態は

良好である。

本書奥書には本文と同筆で「天性寺聖地蔵尊縁起」との書名が見えており、本書については本来このように呼称すべきものであるが、今は通称に従うこととする。なお、国文学研究資料館古典籍総合目録データベースには2021 年5 月段階で未登録である。

本書の成立年代について、辻陽史^[1]は、縁起本文の検討から『和泉名所図会』成立以後の十八世紀末から十九世紀半ばまでと見るが、後述のように十八世紀前期頃には成立した本文であると推定され、料紙・書体からみてもこの時期の制作であると考えられる。

3. 縁起本文の分析

本縁起の類話には、元禄四年〔1691〕刊『地蔵菩薩利益集』巻第二十話「岸の和田天性寺地蔵菩薩尊靈験の事」(同十年刊『延命地蔵菩薩経直談鈔』巻三第六十五「泉州岸和田天性寺地蔵縁」は『利益集』を引く)、元禄十三年〔1700〕刊『泉州志』「天性寺地蔵」、寛政八年〔1796〕刊『和泉名所図会』「蛸地蔵」などがある(辻陽史^[2]の指摘に拠る。縁起本文は辻論考に翻刻がある。また『利益集』については清水邦彦^[3]参照)。

これらには次のような要素が共通している。

- A 建武年中、地蔵菩薩像が蛸の背に乗って海中から出現したが、堀の中に捨てられた(『絵巻』では隠された)こと。
- B 天正年中、根来・雑賀と合戦に及んだ際、法師が奮戦し紀州勢力を撃退したこと。
- C その奮戦がかつて蛸の背に乗って出現した地蔵菩薩像の霊験であったと判明したこと。
- D 地蔵菩薩像が天性寺に安置され、蛸地蔵と呼ばれるに至ったこと。

これらをこの縁起の基本的要素とするならば、『絵巻』および『利益集』では、次のような縁起説が付加された形であると言える。

- ① 今の岸和田城のある所にかつて大伽藍が存在し、その本尊・地蔵菩薩像が海に棄てられた（『絵巻』）。
 - ② 建武年中、海中から出現した地蔵菩薩像によって津波が静まった（『絵巻』）。
 - ③ 文禄年中、「城主」（松浦肥前守）が国替の際、夢に現れた地蔵菩薩より錫杖を下賜され、代々の家宝とされる（『絵巻』）。
 - ④ 何らかの障りがあったために地蔵菩薩像が城内から城外へ移される（『絵巻』『利益集』）。
 - ⑤ 天性寺に移された後、夢告によって京での修復は中止される。岸和田城合戦の際の無数の弾傷のうち、靈験の証拠として一つだけは直さずに留めた（『絵巻』『利益集』）。
- ⑤に関わって、『利益集』では合戦の直後にも弾傷を確認し、それによって、合戦で活躍した法師は地蔵菩薩像の靈験によるものであったことが知られる。『泉州志』『和泉名所図会』では堀に蛸が漂っていたことが地蔵菩薩像再発見の契機になったとすることでその靈験が保証されるというかたちをとるが、これは、生身の地蔵菩薩像に関わる説話の定型からは外れた、後の時代になって簡素化されたものと見るべきだろう。一方、『絵巻』では、合戦の後、城主の夢に地蔵菩薩が現れ、自らの靈験によるものであるが殺生を行なうことはできないので眷属の大鬼王を遣わしたとする。ただしこの言は、後に⑤で確認される地蔵菩薩像の弾傷のくだりと齟齬を来たし、かつ法師が戦場で持つ錫杖が『絵巻』に幾度も描かれる錫杖と同形であること、加えて③のように『絵巻』では錫杖そのものに大きな意味が与えられていることからして、現存の『絵巻』制作段階で詞書のみに改変が加えられたと推定できる。

なお、辻陽史^[1]は、『和泉名所図会』に拠りつつ殺生忌避の説が付加されたと見て、『絵巻』成立を『名所図会』以後の十八世紀末から十九世紀半ばまでの成立とするが、巷間の説に取材した『利益集』が刊行された後、天性寺内において整合化・長大化が行なわれたものとして十八世紀初頭に『絵巻』が制作されたものと位置づけておきたい。

4. 和泉松浦氏と縁起

『利益集』および『絵巻』の成立に先立つかたちの縁起については、B Cが形成された段階と④D⑤が形成された段階に分けて考えるべきであろう。

前者については、城外の天性寺に移管される以前の

縁起で、天正十二年〔1584〕正月に小牧長久手の戦いに関わって勃発した岸和田合戦における勲功と靈験が結びつけられたものである。羽柴秀吉は紀州勢力に抗するため、その前年から麾下の中村一氏を岸和田城に配し、松浦安太夫（宗清）が率いる国人衆がその与力となって岸和田城を防衛する。松浦安太夫は、和泉国半国守護であった細川氏の元で守護代を務めた和泉松浦氏の系譜に連なる人物で、『岸和田城主代々次第』が第二代と数える人物である。元は初代城主の松浦肥前守光に仕えた寺田氏の者であったが経緯は未審ながら松浦姓を称するようになった（和泉松浦氏については山中吾朗の一連の論考を参照^[4]）。翌年、安太夫は岸和田合戦での勲功によって、伊勢国川口・井生一万一千石に移領、関ヶ原合戦では西軍に属して敗れ、翌慶長六年〔1601〕に病没したと伝えられる（『一志町史』）。安太夫が『絵巻』のように「肥前守」に叙されたとする史料は見あたらないが、松浦周防守盛（岸和田周防守）を除き、守・虎・光と代々が「肥前守」を官途としていたことから（廣田浩治^[5]）、その可能性はあろう。『名所図会』でも「松浦氏」が城に籠ったとするが、一方、『利益集』では「小出大和守」すなわち岸和田藩第三代藩主の小出吉英の時代に地蔵菩薩像を発見し、その後に岸和田合戦が起こったと誤って記している。この誤りは、「かくて根来雑賀も羽柴秀吉公のためにうちおさめられて」とする一文にみられるように秀吉時代の岸和田と、「松平周防守（康重。第四代藩主）在城の時、いささかゆへありて」とする松平時代との対比を明確化するために行なわれた恣意的改変と見るべきで、守護代として泉州に君臨した在地の戦国大名であった和泉松平氏をことごとく靈験譚というあり方が本来であったと考えられようか。その点、『絵巻』が冒頭部分で地蔵菩薩像を「岸和田の地主神」とすることとも関連するものと考ええる。

5. 岸和田城下の縁起として

岸和田合戦時の「城主」から次代の城主に替わった段階で（『絵巻』：松浦肥前守→小出播磨守〔初代藩主 秀政。秀吉叔父〕。『利益集』：小出大和守〔三代藩主 吉英〕→松平周防守〔四代藩主 康重〕）、地蔵菩薩像をめぐる種々の災いが生じる。『絵巻』は「白法師」として顕われた地蔵菩薩を人々が恐れたとし、『利益集』は「いさゝかゆへありて、この地蔵堂を近村池の尻というところ」に移したとしている。和泉松浦氏の靈験伝であったものが他氏の統治下においては障りをなしたという本来の理解が、『利益集』では豊臣と徳川との対立史観の中で改変されたものと言える。

この④を契機として城外にでた地藏菩薩像は、得誉泰山によって天性寺に移管・安置されたと伝えられる。天性寺は天保四年〔1833〕の火災によって『絵巻』以外の寺院史料を失ったと見られ、その創建の次第を同時代史料によって裏付けることは難しい。鬼洞文庫蔵『南郡寺社覚』に拠れば天正年間の開創（日本歴史地名大系）とされる一方、増上寺蔵『浄土宗寺院由緒書』第十二冊〔元禄九年〔1696〕〕写『河内・和泉・摂津』（『増上寺史料集』五）では、寛永二年〔1625〕に「大守」（松平康重）より東西三十間南北十六間の寺地を請い受けた得誉によって創建されたとする（同書によれば得誉は寛文十三年〔1673〕遷化）。天性寺への移管を『絵巻』のように小出播磨守時代のこととすれば天正十三年から同十九年までの間の創建となり、『利益集』の言う松平康重時代とすれば寛永二年に齟齬はない。ただ、大澤研一^[6]が指摘するように、岸和田城下町の整備事業が松平時代に本格化したことを念頭に置くならば、（あるいは天正年間に建立された地藏堂から）寛永二年創建の天性寺の秘仏本尊として迎えられたと理解するべきであろうか。天性寺が岸和田城から坤の裏鬼門にあたる地に建つことも含め、城下町の形成史の中で検討を進められるべき観点であると考えられるが、後考を俟ちたい。

注

- [1] 辻陽史「護持山朝光院天性寺所蔵『天性寺聖地藏尊縁起』の成立過程—地藏菩薩の利生譚から岸和田城史譚へ」（関西大学『国文学』99, 2015.3）。
- [2] 辻陽史「護持山朝光院天性寺所蔵『天性寺聖地藏尊縁起』および「天性寺地藏菩薩縁起」五種紹介」（関西大学『国文学』98, 2014.3）。
- [3] 清水邦彦『「路傍の地藏」の宗教史的考察 翻刻編Ⅱ『地藏菩薩利生記』翻刻』（科研費研究報告書, 2014.3）。
- [4] 山中五朗「和泉国松浦氏小考—永禄年間を中心に」（小山靖憲編『戦国期畿内の政治社会構造』和泉書院, 2006.5）。同岸和田城主松浦氏について」（岸和田市郷土文化室『from M』29, 2007.9）。同「戦国期和泉の地域権力と岸和田城」（大澤研一・仁木宏編『岸和田古城から城下町へ—中世・近世の岸和田』和泉書院, 2008.8）。
- [5] 廣田浩治「松浦周防守盛の発見」（泉佐野の歴史と今を知る会『会報』266, 2010.2）。
- [6] 大澤研一「岸和田城下町の成立」（大澤研一・仁木宏編『岸和田古城から城下町へ—中世・近世の岸和田』和泉書院, 2008.8）。